

東光原

52

熊本大学附属図書館報 Kumamoto University Library Bulletin
TOKOGEN ISSN 0917-7604 <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>

November 2008

貴重資料展

永青文庫の 源氏物語の中から

永青文庫セミナー

細川重賢夫人の手紙

『学校方格帳』の翻刻データ公開について



第25回 附属図書館貴重資料展

永青文庫の源氏物語の中から

徳岡 涼



今年は、『源氏物語』が、『紫式部日記』に記され、文献に登場してから千年とされる。各地でも源氏物語に関連した催しがなされている。

熊本大学附属図書館でも、10月30・31日、及び11月1日にかけて、寄託されている永青文庫の源氏物語に関する典籍の展示と、最終日には、森正人教授の「源氏物語と住吉の姫君」、また、私も「永青文庫の源氏物語」と題して講演をさせていただいた。

この企画展示を支援してくださった、永青文庫と熊本大学附属図書館の方々、そして、展示や講演会にお運びいただいた多くの方々に篤く御礼を申し上げます。

さて、今回は、26点にのぼる典籍を展示したが、その概要について触れておきたい。

企画をスタートさせた段階から「源氏物語前後の物語文学」、「源氏物語の書写本」、「源氏物語の享受（古注釈を中心とする）の様相」と三ブロックで構成することは即決であった。どのブロックにも、細川幽斎筆にかかる典籍が配されているが、やはり「源氏物語の書写本」「源氏物語の享受の様相」の中には、この千年紀に相応しい典籍が集中した。

「源氏物語の書写本」には、幽斎筆『源氏物語』がある。紅白梅蒔絵筆筒に収められ、書物自体の装丁も打曇りに金泥で瀟洒な草花林泉文様のそれはひととき目を引く。これらは江戸期の製作にか

かるものの、書写本自体は、源氏本文を書写した上で、注の書き入れがなされ、幽斎の勉学の様を辿ることが出来る。これらの書き入れ注は、幽斎独自のものも見受けられるが、以下のような理由から書写された源氏物語古注釈に拠るものが多い。

幽斎は、中世期に次々と書き著された源氏物語の古注釈書の集成を企図していたが、自身では果たすことはなく、勅勘を蒙って幽斎の元に身を寄せた中院通勝の手によって『岷江入楚』として大成された。この間、幽斎は通勝とともに、当代の古典学者の家、三条西家から様々な源氏物語古注を借り出し手分けし、書写に努める。細川家の源氏学の基礎たるこれらの古注釈書『河海抄』『花鳥余情』『源語秘訣抄』『弄花抄』も蔵されており、「源氏物語の享受」のブロックに配された。

また、幽斎は寄合書（源氏物語は大部なので巻毎に担当を決めて写すこと）にも携わっており、親王、公家、連歌師等と共に源氏物語を書写している。

これらが永青文庫の源氏物語の要となっていることは疑いようのないところで、『源氏物語』が紫式部によって書かれて約六百年後の享受を示す貴重な典籍ということになる。

幽斎関係の源氏物語以外で、展示に供したものの一つとして、北村季吟の『源氏物語』がある。近世初期に『湖月抄』という今日まで最も流布した古注釈書を著した北村季吟筆の源氏物語は、最終帖夢浮橋が、一行毎に、(金・銀・朱〈二種〉・藍・墨・緑)の七色を使い分けて交ぜ書きされる。経典類は、金銀泥で一行ごと交互に色を変えて写されることがあるけれど、『源氏物語』の交ぜ書

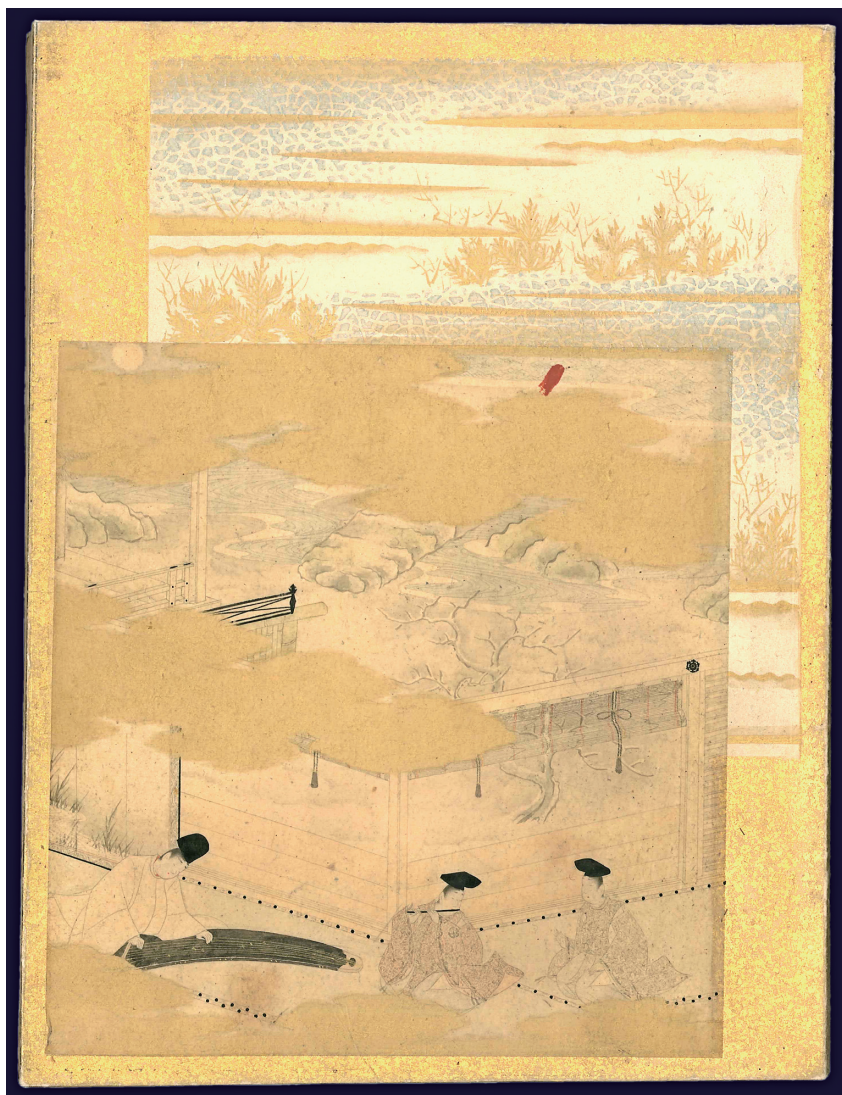
きは、寡聞にして知らない。五十四帖季吟一筆の当本は、七十一歳の折りの書写である。

さて、今回、初公開となったのが、土佐光起の源氏絵を表紙にあしらい、本文の書写は寛永の三筆である松花堂昭乗の筆にかかる五四帖である。以下、当本の覚え書きとしたい。

国宝源氏物語絵巻以来、源氏絵は時代を通じて描き継がれるが、ことに室町末期から江戸初期にかけて興隆を見る土佐派は、足利將軍の、のちには宮廷絵所預の絵師として活躍。特に源氏絵をお家芸としてものした家である。土佐光信あたりから源氏絵が充実するとされるが、五十四帖揃いでは、その光信から光起まで今日わかっているだけで国内外合わせても10数組程度しか残っていない。その光起の源氏絵の出現は今回の展示の最大の収穫であった。

「細密画」とも「細画」ともいわれる筆致で、ほぼ枡形の狭い画面に描かれる源氏絵は、当時、フランシスコ・ザビエルがもたらした眼鏡を使って描かれたとされるが、この手法は光起によって確立された。また、土佐派の源氏絵は極彩色か白描で描かれることが多いが、この光起の源氏絵は淡彩に金泥が施されることにも注意を払いたい。

さらに、各々の巻の画面選択の特異さが際立ち、意図して制作されたものと考えられる。例えば、「須磨」巻では、須磨退去の折り、秋の夜、光源氏が一人琴を弾きながら謡う場面や海に見える廊に出て、沖行く舟や雁の列を眺める場面が描かれ



源氏物語「須磨」巻

ることが多いが、当本は、雪の降る日源氏が七弦琴を弾き、良清に歌わせ、惟光に笛を吹かせる場面を描く。

最後になったが、寛永の三筆について。寛永の三筆とは、寛永年間に活躍した書家、本阿弥光悦、松花堂昭乗、近衛信尋のこと。実は、先の寄合書に本阿弥光悦の朝顔巻が残され、寛永の二筆は、ここ永青文庫の源氏物語典籍の書写に携わっているわけである。遡って信尋の祖父前久は、寄合書に携わってもいる。

貴重資料展及び公開講演会を開催

10月30日から11月1日まで中央館自由閲覧室において、第25回熊本大学附属図書館貴重資料展「源氏物語千年の時」を開催しました。

また11月1日には中央館南棟の放送大学熊本学習センター大講義室で、公開講演会（森正人社会文化科学研究科教授による「源氏物語と住吉の姫君」、徳岡涼教養教育実施機構非常勤講師による「永青文庫の源氏物語」）を実施し、各会場は多数の受講者や見学者でにぎわいました。<関連記事参照>



森教授の講演



News

永青文庫セミナーを開催

第3回永青文庫セミナーを放送大学熊本学習センター大講義室で11月1日に開催しました。今回のテーマは「細川重賢夫人の手紙」、講師は川口恭子附属図書館客員教授でした。

セミナーに先立ち、10月30日より公開の貴重資料展に合わせて手紙類の展示を行いました。

講演内容に関連した、展示会場での講師による個々の手紙についての詳細な説明は、多くの見学者の好評を得ました。

<関連記事参照>



川口客員教授の説明に聞き入る見学者

第3回 永青文庫セミナー

細川重賢夫人の手紙

川口 恭子

1. 夫人の人となり

久我右大臣通兄卿娘 由婦

享保15年(1730)正月28日誕生

結婚 寛延3年(1750)2月27日

久我家は公卿で村上源氏の一流、中院流の一つといわれる。先祖の源雅美が鴨川と桂川が合流する久我(京都市伏見区)の地に別荘をいとなみ、久我太政大臣と呼ばれたことにはじまるとする。家業は笛と書かれているが、当道支配の家である。当道とは目の不自由な人が琵琶や琴・三味線・鍼・灸・按摩などを職業とするが、その免許を与えた家である。

細川家との関係は、系図に示したように、近世細川家第5代綱利が、弟新田支藩主利重の娘具を養女として、久我右大臣惟通と結婚させたことにはじまる。重賢夫人の祖母である。

2. 現存する夫人の手紙

重賢に対して出された夫人の手紙は別紙の通りである。(参照 手紙一覧表)

明和4年3月11日から同月29日まで	3通
明和5年6月7日から翌6年3月6日まで	30通

表紙の言葉

今号の表紙は貴重資料展「源氏物語千年の時」でご覧いただいた、幽齋筆『源氏物語』です。行間などに細川幽齋(藤孝)の手による書き入れ注がみられます。詳しくは徳岡先生の文章をご一読ください。

明和4年3月の手紙は、長男胤次(治年)の疱瘡全快のこと、側室嘉門着帯のことが書かれており、嘉門は同年9月8日に次男豪次を産んだ。重賢は明和3年5月1日江戸を出発し、6月4日熊本着、明和4年正月は熊本で過ごし、3月5日熊本を出発し、江戸着は4月9日である。この時も側室の此井・嘉門は重賢のお供をしている。

明和5年5月1日江戸を出発し、木曾路を通過して、6月6日熊本着である。翌年の参勤は、3月5日熊本を出発し、4月17日江戸に到着した。この期間の夫人の手紙であり、側室の此井・嘉門はこの時も重賢のお供をしている。

3. 手紙の形

一覧表に示したように、折紙1枚から2枚綴り3枚綴り、最も長いものは5枚綴りまでである。切紙も1枚から長文の切継紙が多い。

宛名は侍従様、花君の2種。差出人もゆふ、蘭舟(船)の2種である。

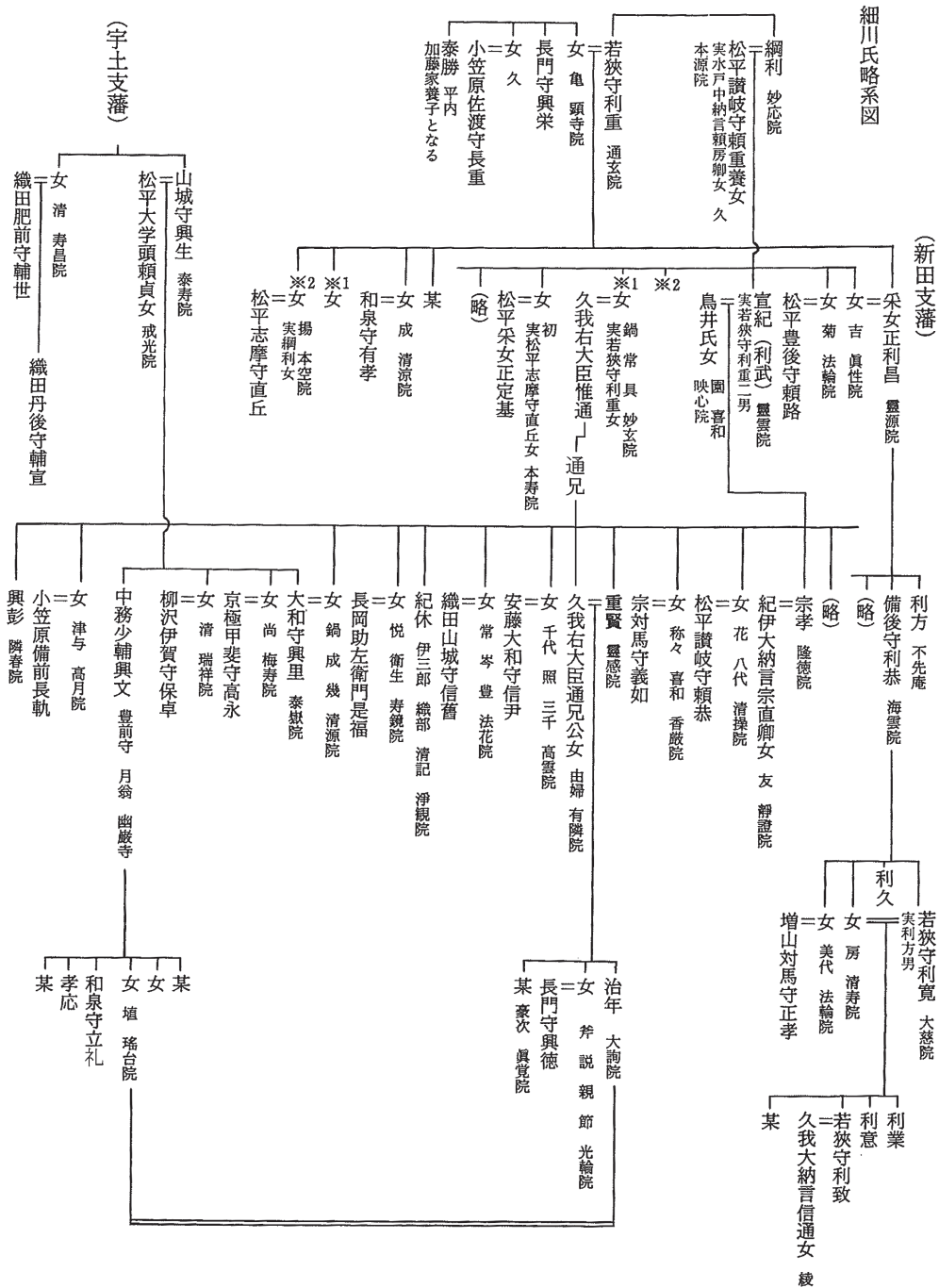
重賢は延享4年(1747)11月28日従四位下侍従に叙任された。

花君は重賢の俳号、花(華)裏(裡)雨からとられたものである。夫人の俳号は蘭舟(船)である。

なお、No. 26歳暮の祝儀状とNo. 27年賀状は散らし書きである。



【細川氏略系図】



『重賢公日記』下巻（出水神社，1989.2）より著者作製系図を一部修正の上転載。

【手紙一覧表】

No.	年月日	形式	宛名	差出人名	内容
1	(明和4年) 3月11日	折紙	花君	蘭舟	橋本源右衛門 8日江戸着 胤次痘瘡快復に着の礼
2	(〃)	折紙 3枚綴	花君	蘭舟	橋本源右衛門 8日江戸到着 胤次痘瘡のこと かもん着帯のこと お土産を待つ
3	(〃) 3月29日	折紙	侍従	ゆふ	熊本発足・室住・室着祝、道中ご無事で 胤次のこと 斧のこと 此井・かもんは東海道か木曾路か
4	(明和5年) 6月7日	折紙	侍従	ゆふ	暑中見舞 大坂着を祝
5	(〃) 水無月7日	折紙	侍従	ゆふ	暑中見舞 白金・子供達のこと
6	(〃) 水無月7日	折紙 2枚綴	花君	蘭舟	時候挨拶 星糞(魔よけ)の礼 白金・子供達のこと 中務少輔(月翁)の安否尋ね
7	(〃) 水無月23日	折紙	侍従	ゆふ	鶴崎着・熊本着を祝 筒口・二の丸・宮内より便り 子供達のこと
8		折紙			6月15日祭り見物のこと
9		切紙			追伸 天候のこと
10		切紙	花君	蘭舟	鶴崎着を喜ぶ
11	(〃) 6月27日	折紙	花君	蘭舟	残暑見舞 子供達のこと 平太左衛門の安否を問う 此井へよろしく
12	(〃) 6月27日	切継紙 色紙	花君	蘭舟	静証院肩の痛み 子供達のこと 清源院逗留
13	(〃) (7月27日)	折紙	花君	蘭舟	6月18日お手紙の返事
14	(〃) 7月27日	折紙 5枚綴	花君	蘭舟	静証院肩の痛み 智鏡院年賀和歌集作成のこと 胤次生身玉の祝 子供達のこと 酒事なく下戸となる
15	(〃) 9月朔日	折紙	侍従	ゆふ	御機嫌伺 八朔の祝 月見の肴の礼 京都妹の安産
16	(〃) 菊月朔日	折紙 4枚綴	花君	蘭舟	7月19日付お手紙の礼 静証院・清源院、子供 達のこと 27日月見し楽しんだこと 龍口上屋敷の家臣達
17	(〃) 菊月22日	折紙	侍従	ゆふ	返書 弟久我信通の春宮大夫宣下を喜ぶ

No.	年月日	形式	宛名	差出人名	内容
18	(〃) 9月22日	切継紙	花君	蘭舟	静証院肩の痛み全快 清源院来邸 京都より職 惣檢校来り 琴を弾く 子供達の食事・行儀の躰けについて
19	(〃) 10月18日	折紙 2枚綴	花君	蘭舟	9月18日のお手紙の礼 9月17日稽古能の番付 拝見 智鏡院年賀和歌集のこと 子供達のこと
20	(〃) 神無月18日	折紙 3枚綴	花君	蘭舟	寒気お見舞 10月9日亥猪の祝の礼 智鏡院の来邸 子供達のこと
21	(〃) 11月11日	折紙	花君	蘭船	寒中お見舞 参勤時節伺について 白金・子供達のこと
22	(〃) 11月11日	折紙 3枚綴	花君	蘭船	10月5日付お手紙の礼 稽古能の番付拝見 子 供たちのこと 省略の書付拝見・承知 上屋敷の家臣の消息
23	(〃) 霜月19日	折紙 3枚綴	花君	蘭舟	先月18日付飛脚便着ご返書の礼 膝の具合尋ね 儉約のこと 子供達のこと 文箱の礼 水前寺 出浮について
24	(〃) 11月21日	切紙			追伸 膝の痛みの快復を喜ぶ
25	(〃) 12月19日	切継紙	花君	蘭舟	霜月23日付お手紙の返事 白金・子供達のこと うどん・鴨拝領の礼 年忘れの酒事
26	(〃) 12月22日	折紙 散らし書	侍従	ゆふ	歳暮の祝儀状
27	(明和6年) 正月朔日	折紙 散らし書	侍従	ゆふ	年賀状
28	(〃) 正月5日	切継紙	花君	蘭舟	12月2日付お手紙の返事 白金・子供達のこと 初馬懸物進呈 智鏡院へ進呈の小袖出来
29	(〃) 2月18日	折紙	侍従	ゆふ	京都弟久我信通の従二位昇進の祝に対する礼状
30	(〃) 2月18日	切継紙	花君	蘭舟	正月15日お手紙の礼 智鏡院年賀祝 子供達の こと お手製のコタツのこと 妙解院参詣 道 中ご無事を祈る
31	(〃) 弥生朔日	折紙	花君	蘭舟	静証院のこと 清源院・埴姫来邸 子供達のこと 道中のご無事を祈る
32	(〃) 3月6日	折紙	花君	蘭舟	熊本ご発足を祝 子ノ神に代参 御符進上 道中のご無事を祈る
33	(〃) 3月6日	切継紙	花君	蘭舟	静証院年賀祝 智鏡院歌集 子供達のこと 参勤途中、京都久我邸へお立ち寄り願う

4. 儉約に関する手紙

重賢は、世上、宝暦の改革といわれる行財政改革を行い、藩の建て直しを行った名君としてよく知られているが、その後も改革は引き続き実行した。

中老として重賢を補佐した堀平太左衛門は、明和3年11月家老となるが、藩の総収入34～35万石に対し、支出の総額は39万5千石であり、損亡高も17万5千石であったので、翌年から5ヶ年間の儉約・省略を命じた。明和4年には、5ヶ年間儉約を命じ、家中の手取米は13石としたが、翌5年10月2日、再び、今年から5ヶ年間格別省略を命じた。

この儉約・省略令に対する夫人の手紙がNo. 22折紙3枚綴りの11月11日の手紙である。2,000文字を超える長文であるが、現代訳で紹介すると次の通りである。

10月5日付けて御書を頂だき、忝く拝見いたしました。折柄冷え冷えしうございしますが、何のご支障もなく、ご機嫌よくお過ごしのことを伺いましておめでとうございします。先月21・28日には能のお稽古を遊ばしましたとのこと、ご番付を頂き拝見いたしました。胤次へも拝見させました。相変わらず切ばかりなさっておられるご様子ですね。ご気丈なことと存じます。用人の(福田)壱平へも拝見させました。ご機嫌よく勇ましくお過ごしのこととはめでたいことと存じますが、宙返りなどはなさいませんようお願い申し上げます。鷹野にも寒い時分はお厭いくださいませように。

熊本の筒口屋敷にお住まいの弟清記様も、先だっては体調が勝れられないとのことでしたが、ご全快なさった由、おめでとうございします。能のお稽古の時は、二の丸の弟興彭様もお出で遊ばされましたとのこと、ご兄弟お揃いになり、皆様お元気で、おめでたいことと存じます。

江戸では、白金下屋敷の静証院様もご機嫌

よく、紀伊家の小石川の皆様もお揃いで、めでたいことと存じます。

殿のご発案で、干れいし(荔枝)をお送り頂き、忝く存じます。好物ですので、早速戴くことにいたします。お世話頂きましたこと大変ありがたく存じます。

1 御妹三千姫様のご主人安藤大和守様のご体調が、まだ、捗々しくないとのこと、お気の毒に存じます。

1 御別紙の様、拝見いたしました。

今度、厳しくご省略(儉約)を仰せ出されましたとのこと、お書付もお送り頂き、堀平太左衛門からも(樋口)元賀の方へ知らせがあり、元賀に読ませて承りました。

そちら様でも、厳しいご省略を仰せ付けられましたとのこと、用人からも委しく申してきました承りました。さてさて、ご尤ものことと存じます。

こちらでも省略するようにと仰せ頂き畏まりました。これまでも、何かと省略もいたしました、行き届かないこともございました。

今度のことは、色々おめでたいこともあって、ご入用もあることとございしますので、どのようにでもして暮らす所存でございしますので、またまた、厳しく申しつけます。付きの者についても、調べて、省略をするように申し付けます。壱平へ頼みまして、万事、世話をしてくれる筈でございします。

今度、段々調べましたが、まだ調査がすんでおりません。私も思いつきましたことは老女達にも申しつけます。これ迄、奥向きで行き届かなかったことは、お聞きになっているかと思ひます。

次右衛門も番入いたしましたし、奥付の者も3人になって締めりもよろしゅうございします。(木村)只右衛門も何かと世話してくれますし、高瀬も快く勤めてくれます。高瀬が、皆と話し合って、省略するよういたします。これ迄、末の方で、少々心得違いのこともございましたが、只右衛門と高瀬が申し合わせ、

世話をしてくれ、奥向きもよほど締まってきました。

次右衛門は、なじみの者でございますので、随分、親切に世話をしてくれますので、喜んでおります。(成瀬)尉内は、ますます年寄り、時々持病で引き込むこともございます。次右衛門がよくしてくれますので、私はじめ、皆大変喜んでおります。

然し、胤次の河岸舎を2人で勤めることは気の毒に思います。河岸舎にもどうぞ良い者をお付けくださいますようお願い申し上げます。

今度の省略のお書付のご様子では、御前様も、さぞ、お心遣い・お世話遊ばしましたことと存じます。お察し申し上げます。及ばずながら、私も世話いたしますが、私の了見では、行き届かないことで、つまらないことばかりでございます。何事も、江戸にお着きになりました上で、何かとお伺いしたいとお待ち申し上げます。

熊本でも、淋しいことで、お月見も年忘れ会もなさいませんとのこと、こちらでも、同様にしたいと存じます。

先だっては、水前寺へお出でなさいましたとのこと、この時も手軽くなさいましたとのこと、ご尤ものことと存じます。

こちらでも、一向、お酒をのむこともございません。仙寿院・栄元なども一度もお呼びしていません。お呼びすれば、あまり粗末にもできませんので。その上、前々と違い、私もお酒を頂きませんので、難しいと思い、お招きもしていません。

1 胤次は丈夫で、物事についての了簡もよく、大人しく稽古事に励んでおられます。相変わらず、しおらしくいたしておられます。私が少し癪の様子でありますと、河岸舎に来るようにとお世話されます。元気の様子に大変喜んでいます。

斧・豪次も、随分丈夫でございます。斧は吹き出物も少しも出来ず、食事の食べ方もよ

うございます。昼間は乳を飲むのも忘れ、遊んでおられます。言葉のよく分かり、続き歌などを歌うことができるようになりました。何事か気に入らない時は、私の側に来たいということで、乳母よりも私を慕ってくれます。誠にしおらしいことで、その気持ちを大切にしています。

豪次は大変腕白です。手を添えますと歩くことが出来るようになりました。

私は、外に慰みがありませんので、子供達によってまぎれています。昼寝・うたた寝などは一向致しません。そんなことをしましたならば、斧が大変嫌いますので、斧の遊びに、私も浮かれまして、何よりの楽しみでございます。その様子を御覧に入りたいと申し上げます次第でございます。

熊本は、寒気が強く、薄氷も張りましたとのこと、その後はそうでもないとのことでございますが、今頃は如何でございますでしょうか。

江戸も冷え冷えしいことで、当月5日には初雪も降りました。日増しに冷えが強くなりました。

お風邪でも召しませんように、お願いくださいまして、御機嫌よくお過ごしくくださいますように。

平太左衛門はじめ、此井・嘉門へも、恐れ入りますが、よろしくお伝えくださいますようお願い申し上げます。

(追伸)

こちらでも、変わりなく暮らしております。どうぞ、ご心配なく。

この手紙でわかることは、次の通りである。

- ① 熊本の重賢の動静
- ② 熊本からの贈り物
- ③ 江戸下屋敷の静証院のこと
- ④ 妹三千姫の主人安藤大和守の体調
- ⑤ 熊本からの省略の通知
- ⑥ 江戸上屋敷の奥付の家臣達のこと
- ⑦ 胤次・斧・豪次3人の子供達の様子

なお、子供の生年月日は以下の通りである。

- 胤次 宝暦9年(1759)4月25日熊本にて誕生
- 斧 明和2年(1765)9月13日江戸にて誕生
- 豪次 明和4年(1767)9月8日江戸にて誕生

5. 奥付の家臣達

- (1) 福田杢平 先祖は備前国で宇喜田秀家に仕え、秀家没落後、丹後国で細川忠興に召出され、豊前入国後200石拝領。杢平は6代目で、寛延元年御小姓組、宝暦6年用人となった。
- (2) 樋口元賀 先祖は筑後の者で、肥後国に来て町医をしていたが、寛文元年新田支藩主利重に医師として召出され、元禄17年具付となった。当元賀は、3代目で、京都で具付医師として召出され、具没後は江戸定詰めとなった。寛延3年重賢

夫人の定付となった。なお、明和5年11月28日病死とあるので、最期までご奉公したことがわかる。
(3) 木村只右衛門 先祖は江州彦根の産で、杉山検校の弟子で、綱利生母清高院付として鍼のご用を勤めた。父は具付であった。当只右衛門は寛延3年から重賢夫人付となった。
(4) 成瀬尉内 先祖は徳川家康に仕え、徳川忠直付、後お暇、池田光政に仕える。初代は、紀州家に仕え、後、久我家に仕え、正徳元年具付。尉内は2代目で、はじめ具付、具没後は熊本・江戸御裏勤めをし、寛延3年から重賢夫人付となった。明和5年は72歳である。

なお、仙寿院は將軍家治付の奥医師河野通頼である。栄元は將軍家治付の奥医師吉田忠祝か兼康弘道のいずれかであろう。

かわぐち やすこ 附属図書館客員教授



紅白梅蒔絵筆筒

『学校方格帳』の翻刻データ公開について

永村典子

熊本大学附属図書館では、このたび、財団法人永青文庫から寄託を受け当館で保存している「細川家北岡文庫」の資料のひとつ、『学校方格帳』の翻刻データを熊本大学学術リポジトリ^{*1}（以下、学術リポジトリ）に登録し、平成20年10月1日より公開を始めました。

当館では、古文書資料の電子化を目標に掲げ進めているところですが、これは、その目標のもと、熊本大学附属図書館古文書勉強会^{*2}で進めてきた翻刻作業・データ入力・編集が終わったことにもなるものです。

原資料の『学校方格帳』は、第6代熊本藩主細川重賢が創設した藩校「時習館」に関する資料で、宝暦4年（1754年）10月15日の学寮設置命以降幕末まで、学政を掌る部局「学校方」へ出された規則の通達を記録したものです。内容は、学校の名称・学生・教育内容・教育方法等の他、学校敷地・学校経営すべてにわたっています。

実際の利用は、図書館ホームページで公開している文庫目録『細川家日記・古文書分類目録 正

編』に学術リポジトリへのリンクを形成し、翻刻資料までたどり着きやすいようにしています。皆様のご利用をお待ちしています。

最後に、一連の作業をご指導いただいた川口恭子客員教授、それから、学術リポジトリへの登録・公開を快くご許可いただいた財団法人永青文庫に深く感謝申し上げます。

1. 原資料について

資料名 『学校方格帳』

財団法人永青文庫所蔵、熊本大学附属図書館寄託資料

請求番号 108.6.63-7

大きさ 縦31cm 横22.5cm

本文 105丁

2. 翻刻作業について

熊本大学附属図書館古文書勉強会で行った。

翻刻作業期間

平成16年2月3日(火)～平成17年10月18日(火)

3. データ入力作業・編集作業について

利用相談担当で担当し、WORDを使用してデータ入力・編集を行った。入力・編集にあたっては、行替えは原文の通りとし、原文が朱筆の部分は赤字で表記するなどできるだけ原資料の体裁に従った。

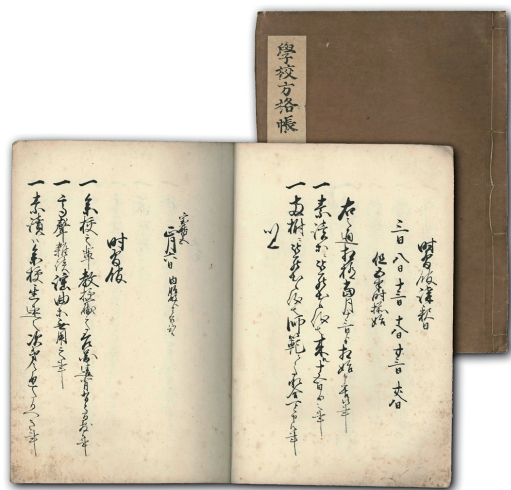
入力作業期間 平成18年1月～平成20年8月

編集作業期間 平成20年8月～平成20年9月

4. 翻刻資料アドレス

<http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/handle/2298/9348>

(利用相談担当)



*1 熊本大学内で生産された学術研究成果物（学術論文、学位論文、プレプリント等）をサーバーに組織的に収集・保存し、ネット上に広く公開するシステム。

*2 図書館職員有志による勉強会。川口恭子客員教授指導のもと、大学の休業期を除いて、毎月2回、第1・第3火曜の夜、勉強会を行っている。翻刻作業時のメンバーは10名。

日誌 (平成20年7月～10月)

- 4/16 第1回係長会議
- 5/20 第2回係長会議
- 6/19 第3回係長会議
- 7/26 九州地区国立大学図書館ソフトボール大会 (鹿児島大学)
- 8/14-15 夏季一斉休業
- 9/10-12 目録システム/ILLシステム地域講習会 (鹿児島大学)
- 9/10 熊本県大学図書館協議会実務者研修会・セミナー (東海大学)
- 9/29 第2回附属図書館運営委員会
- 10/6 熊本県内図書館職員レファレンス研修
- 10/7-10 大学図書館職員短期研修
- 10/8 工学部マテリアル工学科ガイダンス
- 10/9 第56回九州地区医学図書館協議会総会
- 10/9-10 基礎セミナー「図書館活用法」
- 10/15-17 九州地区国立大学法人等テーマ別研修 (長崎市)
- 10/16-17 九州地区国立大学図書館協会実務者連絡会議 (長崎大学)
基礎セミナー「図書館活用法」
- 10/20 第4回係長会議
- 10/21 秋季図書館ガイダンス
- 10/22-24 学術情報リテラシー教育担当者研修 (大阪大学)
- 10/29 秋季図書館ガイダンス
- 10/30 教育学部特別別科ガイダンス
- 10/30-31 NAIST電子図書館学講座 (奈良先端科学技術大学院大学)
- 10/30-11/1 第25回貴重資料展・公開講演会
第3回永青文庫セミナー

附属図書館運営委員会委員

平成20年4月1日現在

館長	教授	田口 宏昭
医学系分館長	教授	宇宿功市郎
薬学部分館長	教授	中島 誠
文学部	准教授	児玉 望
教育学部	教授	杉 哲
法学部	准教授	田村 耕一
理学部	准教授	矢嶋 哲
工学部	教授	尾原 祐三
大学院社会文化科学研究科	准教授	稲葉 継陽
大学院自然科学研究科	教授	伊東 龍一
大学院法曹養成研究科	准教授	水元 宏典
教養教育実施機構	講師	今西 利之

東光原：熊本大学附属図書館報 第52号 平成20年11月刊

発行 熊本大学附属図書館
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号
Tel. 096(342)2273 Fax. 096(342)2210
編集 浦田博臣 岩岡仁美 笠 彩子
URL <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>
